第 540 号

音楽の世界

目　次

論壇　現代音楽、聴取の現在について考える　北條 直彦　2

特集　若い会員は語る（その１）

シューマン作品と対峙した日々　東浦 亜希子　5

パーカッショニスト池上英樹さんとの出逢い　廣瀬 史佳　6

私の音楽活動と夢　小山 佳美　8

まとめ　編集部　9

時評　タメ（為）かダメ（駄目）か！　田脇 淳三郎　10

特別寄稿

Zwickau の第１６回国際ロバート・シューマンコンクールを聴いて（前編）

深沢 亮子　12

長期連載

音・雑記ーひなの里通信ー (49)・・・・・・・・・・・・・狭間 壮　18

名曲喫茶の片隅から (30)・・・・・・・・・・・・・・・・・宮本 英世　20

音 盤 奇 譚 (35)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・板倉 重雄　22

私とラジオドラマ (2)・・・・・・・・・・・・・助川 敏弥　24

読物　作曲家と即興演奏　夢音見太郎　26

随筆　西 洋 演 歌　濁 実 堂　30

訃報　畑中良輔(続編)　31

短期連載

福島日記(11)　小西 徹郎　32

現代音楽見聞記(15)　西　耕一　34

楽譜出版部からのお知らせ　35

CMDJ 会と会員の情報　36

論壇

現代音楽、聴取の現在について考える

作曲　北條 直彦

現代音楽の不毛が云われて久しい。例えば「現代音楽はなぜ難しいか？」「今の人が受け入れられなくて何が現代音楽か？」現代音楽に未来はあるのか？」等等である。実際、現在のクラシック音楽の聴衆の殆どが１８世紀、１９世紀の音楽を中心に聴いていて現代音楽を聴く人はごく少数に限られている。この事は西洋の歴史を振り返ってみれば納得行く事でもあるのだ。つまり、音楽史を社会的に見てみるとブルジョアジーの台頭により１９世紀のロマン派の時代では音楽家と聴衆の関係は新たな時代に入り、古典派時代に成立していた聴き手（王や貴族達）と音楽家間の対話は失われて行く事になった。そして、こう云った音楽家と聴衆の乖離は更に進み現在に至っていると云って良い。此れは、当然の事だが現代音楽と聴き手との関係にも大きく影響し、深い影を落としている。

ところで、今の時代、長足に発展した情報化の波は音源に関する分野でも、レコードから CD、DVD、インターネット上へと早足で進展しているのは周知の事実である。これは演奏会に足を運ばない音楽ファンを大量に産み出す事にも繋がっていよう。此れ等の事が、巨大な消費を持つポピュラー音楽だけでなくクラシック音楽の商業化を急速に進展させたと考えても良いだろう。市場原理が闊歩する今の時代、芸術音楽，ましてや現代音楽が幅広く受け入れられないのは当然の事なのか

音楽現代

2012 年 7 月号　定価 840 円

♪緊急追悼企画（２ヶ月連続）
吉田秀和氏の死を悼む～小澤征爾、青柳いづみこ
インタビュー（再掲載）「吉田秀和氏に訊く」
♪特集＝20～21 世紀生まれの管弦楽曲名曲選
♪カラー口絵
・ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン 2012
「サクル・リュス」
・ウィーン・フォルクスオーパー「こうもり」
「ウィンザーの陽気な女房たち」
♪インタビュー
ルネ・マルタン　斎藤雅広　塚越慎子　渡辺克也
タチアナ・ヴァシリエヴァ　松山冴花　他

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11
TOMY ビル 3F
芸術現代社　TEL3861－2159

も知れない。そこで思い出されるのが前出の言葉「今の人に受け入れられなくて何が現代音楽か？」である。これは一面の真実ではある。だが、それは商品として受け入れ易い様に作ると云う事だろうか？この考え方を押し進めれば、受け入れられれば何でも良い、必然的にＪポップだろうが演歌であろうが現代音楽だと云う事になりはしないか？だからこそ，真の現代音楽であるためにはその時代でしか起こりえない、創り手が生きたその時代の証しとしての音が必要であり、且つ、それが芸術に迄高められている，或はそこに至らずともそれを目指したもので、結果として同時代性の象徴と云える音楽であるべきだと私は考えるのだが。以上を踏まえると、現在、どんな不利な環境や状況があったにせよ、やはり「現代音楽」は芸術音楽に於ける時代の鏡として必要だし、まだまだ棄てたものではない事が解ろう。

ところで我々は西洋音楽の教育を受け伝統的な様式や調性、旋律と云った音楽組織の仕組みや枠組みに知らず知らずのうちに馴されて来た。それは無意識に従来の枠組みで「現代音楽」を観る事に通じよう。結局、我々は今迄馴染んで来た明確な旋律や和声等等を作品に求める習慣に囚われているようだ。しかし、これでは受け身一辺倒と云う事になる。現代作品を聴くには受け一本槍では無く、聴き手の参加，つまり，能動性が大切である。それは，未知の作品世界への探検とも云えようか。或は冒険的である事かも知れない。文学や絵画の鑑賞と異なり、音楽の特殊性は聴覚の様に確実でないものが対象だと云う事もある。一期一会の演奏による表出を、聴き手は急斜面から転がり落ちぬ様，慎重に、苦労しつつ辿って行かねばならない。

それは，聴き手に取って確かに簡単ではなく，ましてや「現代音楽」では尚更である。然し乍ら前者（文学、絵画等）になかった特色や利点を見逃してはならない。それは音楽が抽象芸術である事に起因する。つまり，そこには想像力を各自が充分に働かす余地があると云う事だ。そこで，伝統的音楽にある既成の道順は一旦脇に置き，先入観なしに「現代音楽」を聴いてみるとしよう。その時，抽象から具象への変換が可能となろう。

音楽の持続は固定した静止画やデザイン、流動的な映像や風景へと転換する。風景のイメージに例えると曲のある箇所は、日没時，移り行く茜色の燃える空、又、別の箇所では森のざわめき、鳥達のけたたましい鳴き声と羽搏きのイメージ。別の曲では熱帯雨林の僅かな隙間に差し込む強烈な白く眩しい程の光，別に目をやると突き抜け，気も遠くなりそうな真っ青な空、そして又、別の曲では夜が明ける直前

のしんと静まり返った無機質なビルの谷間の不気味さがイメージされるかも知れない。これとは別の観点から音楽的な事件としての見方も成立しよう。

それは、生演奏から出る音からのみでは無く、演奏家の表情や所作の一挙一動と音の動きを視覚と聴覚で複層的、立体的に高い緊張感を持って追って行く事でもある。この様な視点は特殊な奏法や極端な音域での超絶技巧、風変わりな音色が次々と登場する現代曲へのアプローチとしても有効だと思われる。連続して起る事件の過程をミステリーを読んで行く様に聴く事が出来るならば、それは大いに楽しめる事となろう。聴き手が「現代音楽」の聴取に工夫を重ねる時、理解は大きく前進しよう。だからこそ、良質な聴き手であるためには「解らない」で終わらせず「解らない」悔しさをバネに「解ろう」とする事が肝要となる。つまり、旺盛な音楽的好奇心による疑問、「これは何なのか？」「これはどこに行こうとしているのか？」が必要で、待っていても何一つ、やって来はしないのである。このようにして見えて来た「現代音楽」聴取の困難さは、聴き手が伝統的西洋音楽の桎梏、ドグマから解放され先入観なしの自由な聴取を勝ち取った時、初めて克服されよう。

だが，その為にはまだまだ長い年月が費やされよう。最後になるがヴァイオリニストのクレーメルがいみじくも現代音楽について述べた言葉があるのでこれを紹介しておく。「今の時代、現代音楽に例え優れた作品があったとしても、下界に何の影響も与えないものが珍しく無い。これは，こうした作品に価値がないと云うのでは無く、むしろ逆である。中略～そうした作品が感傷のために知的な理解を要求し聴く者の心を直接揺さぶり動かすに至らないと云う理由によって机の弾き出しや図書館の中で埃を被っているのではないかと危惧している。後略～」　ところで、このような言葉が意味を持たなくなる日が訪れるのは一体全体何時の日の事となるのだろうか？そして又、創り手の側にも勿論、おおいに責任があるのは当然だとしても、しかし、「聴く者の心を直接揺さぶり動かす事」は創る側の才能もあろうが不可能な事とは断じ得ないのではないだろうか？

（ほうじょう・なおひこ　本会　公演局長）

特集：若い会員は語る＿その１（１）

シューマン作品と対峙した日々

ピアノ　東浦 亜希子

今年も６月８日のローベルト・シューマンの誕生日が過ぎ、ツヴィッカウでは四年に一度のシューマン国際コンクールが開催されました。四年前の前回、シューマン生誕の地で《クライスレリアーナ》作品16を弾きたい、という思いから、私もツヴィッカウを訪れました。そこで演奏と向き合うことのできた経験のかけがえのなさは勿論のことですが、到着の翌日に演奏会で《交響曲第２番》作品61を聴くことができた感慨、窓辺に美しい木々が映える練習室の、歌曲や、演奏される機会の多いとはいえない魅力的なピアノ曲までもがあちらこちらから聴こえてくる心地よさ、あるいは、道すがら見たムルデ川の美しさなど、一つ一つがシューマンの存在と結びつき、久々に思い返しても輝きを持って思い起こされます。

思えば、シューマンの研究に興味を持ったことも、十歳の頃、偶然聴いた《クライスレリアーナ》に不思議なほど心惹かれた鮮烈な印象が根底にあるように感じます。独特な幻想世界のように映るシューマンの音楽語法が、ジャン・パウルやE. T. A. ホフマンらの文学作品の内的なものに接近していることは、シューマン初期の作品を演奏する際にそれらが音楽的なイメージを膨らませてくれるという体験と相まって、考察の一つの糸口となりました。その一方で、シューマンの音楽から立ち上る、言葉に表しがたい詩的な表現領域を追求したいという原点は、演奏の上でも研究の上でも、常に課題となって傍らにあり続けています。

長年思い入れを持ち続けている作品も、素晴らしい演奏に接するたび、自分が見過ごしている作品の姿に出会い、新しい聴き方が構築されていく実感を得ます。そうした音楽にいつか少しでも近づきたいと願い、様々なプロセスから作品への共感と理解を深めていけるよう努力していきたいと思います。

（ひがしうら・あきこ　ピアノ 本会正会員　）

特集：若い会員は語る＿その１（2）

♪パーカッショニスト♪

池上英樹さんとの出逢い

ピアノ：廣瀬 史佳

池上さんと初めて共演させていただいたのは、2010 年１２月だった。
現在山梨にお住まいの池上さんとの共演の話を、ある方からいただいた。
初めてお会いした時、「風のような人だな」と感じた。とても、不思議な感覚だった。今までに感じたことのない空気感をもった人だった。電話でのやりとりも妙な緊張感があり、背中に汗をかいたのを覚えている。「この人…ただ者じゃない」

演奏会に向けての練習がスタートした。マリンバの音色のそれは美しいこと。フラメンコを習っている池上さんの姿は、鍛えられたアスリートのように美しい。演奏する姿も、とてもしなやかだ。

心配していた合わせは、何とか終えたものの、今までクラシックばかり演奏していた私にとっては、初めてのタイプの曲も多く、音色、間のとり方など、自分なりに必死に研究した。合わせでも様々なアドバイスをいただき、本番でも多くのことを感じた。

今までに、何回か本番をご一緒させていただき、演奏会後には、メールのやりとりもしている。
印象に残った言葉や、メールのやりとりを一部紹介したいと思う。

池上さん「少しずつコツをつかんでくれているようで、嬉しいです。自分の音楽を壊さずにできていたらいいけど。ホール全体が自分の楽器のように聞くというのを、次に試してみてください。」

私（廣瀬）「ありがとうございます。池上さんの音楽に耳を傾け、同じ方向で進めるように寄り添って弾きました。リハーサルの時にアドバイスしてくださった『瞬時に、池上さんの出した音質に合わせて自分の音も出す』というのも意識しました。そして、池上さんの世界は壊さずに、でも自分の音楽も壊さず引っ込みすぎず、常に同じ息遣いでいようと心がけました。演奏中、かなり近くに池上さんの息遣いを感じました。そしていつも、池上さんの音に包まれて、苦しくなく無理なく、むしろ心地よく、安心して落ち着いて演奏できました。『ホール全体が、自分の楽器のように聞く』次は、このことも試してみます。まだまだ響きや音質など課題は山積みですが、前進できるように努力します。」

人と合わせるということは、どういうことなのか。
個性も違う、お互い違う文化や環境の中で育ってきた感性は、ぶつかったりすることもあるでしょう。自分というものを完全には出しきれないかもしれないけれど、自分らしくいるということは大切だと思う。そして、お互いに心から信頼し合い、尊重できるかどうか、自分自身が相手の要求に耳を傾け、受け入れるだけの余裕があるか、また、柔軟に対応できる順応性があるかどうか…。
未熟ながら、今の私なりに考えたことを書かせていただいた。

東日本大震災復興支援チャリティーコンサート～
2011. 9. 3／笛吹市スコレーセンター

池上さんとは、今年も９月、１０月に共演する機会に恵まれ、また自分自身を高める良い機会になるだろうと思っている。今、ピアノと太鼓との新たな曲に挑戦中で、弾き方もリズムも激しく、鍵盤も上から下まで使うので、かなり体への負担もある。低音もオクターブで鳴らし続ける箇所もあって、自分の音だけでも、頭が痛くなる時がある。太鼓の音が入ると、更に音圧や振動が凄い。でも、絶対に弾けるようになりたいので、弾けるようになった自分を想像しながら、練習に励んでいる。

これからも、自分自身に負けないように、気持ちを強く持って歩み続けたい。

（ひろせ・ふみか　ピアノ　本会青年会員）

特集：若い会員は語る＿その１（3）

私の音楽活動と夢

ピアノ　小山 佳美

今回、このような機会をお与え頂きまして、ありがとうございます。自身の、音楽活動、夢、将来に対する抱負など、自由に書いて下さい・・・という事でしたので、私は自分の音楽活動や夢を書きたいと思います。

私の夢は、日本の作曲家や作品を広めていく事です。

コンサートで演奏する筆者

現在、コンサートの他に、レストランや施設などで演奏を行っています。この時は、現代音楽・邦人作品の他に、クラシックや童話など、雰囲気にあった演奏をしますが、邦人作品の曲について聞かれることが多いです。音色や演奏法、内容に興味を持ってくださる方がいて、大変嬉しく思います。

自身のコンサートで、現代音楽・邦人作品の演奏会を行った時に、アンケートを取りました。その中に、「コンサートに、なかなか行きにくい」という意見があったことから、いくつかご紹介させて頂きます。

＜なぜ、コンサートに行きにくいのか？＞

・チケットが高い　・敷居が高い　・演奏時間が長い　・知らない曲が多い　・イメージしにくい　・・・等でした。

このように、貴重な意見が聞けて大変参考になりました。上記の事から、現代・邦人作品に興味や関心をもてるコンサートを行えば、足を運んでくれる方が増えるのではないでしょうか。現代音楽は、なかなか普段聞き慣れないので、退屈だと感じてしまうようです。現代音楽・邦人作品を、お客様に聴いていただくことはもちろんですが、演奏と何か・・・を組み合わせれば、インパクトがあって心に残るのではないかと感じました。

以前、『音楽と絵画、写真によるアートの世界』のコンサートに参加させて頂きました。このコンサートは、現代音楽を中心に演奏するのですが、その曲に対する

イメージを、絵画や写真の世界でも表現して頂きました。そして、このコンサートに合う香りも作って頂き、プログラムに香りをつけ、見て・聴いて・嗅覚で楽しんで頂きました。

その結果、プログラムの解説を見るより、絵画や写真を見た方が、想像しやすいという意見を頂き、大変好評でした。これで終わりではなく、続けていくことが大切だと思います。

このコンサート以降、私は演奏するときに、自分なりにイメージする写真や絵を演奏現場に持って行っています。聴く人によって、作品に対して感じること、イメージすることはあると思います。しかし、演奏以外の要素が少し手助けすることによって、想像する幅が広がり、関心をもって頂けるのではないかなと思います。実際に、興味を持ってくださる方々が増えていっているように感じます。これをきっかけに、コンサートに足を運んで頂けたらいいなと思います。

まだまだ勉強中ですが、一人でも多くの方が、邦人作品を演奏し、聴いてくださる方が増えますように・・・。

（こやま・よしみ　ピアノ　青年会員）

★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆

まとめ

最近の本会は、若い会員が増加する傾向にありながら、本誌の記事は、熟年または実年の執筆者のものが多く、若い会員の意見を掲載する機会が少なかったので、本誌の編集会議において、自薦、他薦も含め 20 代から 30 代前半の若い会員に、ご自分の音楽活動、ご自分の夢、希望、将来に対する抱負、社会に対する批判、など自由に書いてもらったらどうか、ということが話し合われ、『若い会員は語る』という特集を組むことになりました。

そして、まずは、ピアノ、声楽部門それぞれ３人の会員に執筆をお願いし、また、それ以外の若い会員からも投稿があれば掲載するという趣旨で、計画が進められました。

しかし、編集長のミスで、声楽の三人には原稿依頼文が届いておりませんでしたし、自由投稿の呼び掛けも、時期的に遅すぎ、原稿が集まらなかったため、今回の特集は『若い会員は語る（その１）』として、三人のピアノ会員の文章を掲載することとし、後日、特集（その２）を組み、声楽会員や今回執筆しなかった会員の意見を掲載する予定です。

昔から、「音楽活動と生活の両立」は難しい課題で、いま老年を迎えた音楽家たちも、それぞれ、様々な苦労を積み重ねて来ていると思いますが、いまの時代は、我々が若かった数十年前より、それがさらに困難になって来ていると思われます。

そのような現実を生々しく訴える文章も、密かに期待していたのですが、若い音楽家たちは、そのようなリスクを承知の上で、敢えて音楽の道を選択したことでしょうから、三人の執筆者が、まずは、自分がめざす音楽活動、自分の夢について語ったのは当然のことと思います。内容は三者三様ですが、それぞれ、いま各自がもっとも関心を持って立ち向かっていることが、生き生きと素直に書かれており、好感が持てました。

若い音楽家たちの意見を本誌で紹介する試みは、これからも折をみて続けて行きたいと思います。50 年続いた我々の活動を発展的に継承して行くためには、これからの時代を担う若い人たちの力が欠かせないと思いますから。

（本誌　編集長　中島 洋一）

時評　タメ（為）かダメ（駄目）か！

少し前まで放映していた外為のテレビコマーシャルの話しだが、女性が自分のケーキを食べようとすると、別の女性が「ダイエット中だったわね」と、ケーキを横取りして「貴女の為だから....為だから」と言うのがあった。ケーキを横取りする女性のあっけらかんとした厚かましさと、取られた方の女性の困惑した表情がおかしかった。そして最後に「あなたのための外為」という嫌みなオチで終わる。

肉親や、知人に「自分の為に」色々助けてもらい、有難い思いをすることはしばしばあるが、見ず知らずの他人の場合はどうだろうか。実は物事によっては、見ず知らずの方々から「自分の為」になる有益な知恵を授かり、有難い思いをすることが結構あるのだ。

私のパソコン歴は 30 年に及ぶが、希に、システムが想定外のトラブルに見舞われることがある。そうした際に頼りになるのが、全国の津々浦々に存在すると思われる、上級ユーザーまたはメーカーの技術者の知恵である。そういう人達の回答を当てにして、インターネット上で質問する。その場合、こちらの症状を出来るだけ詳しく報告するのがコツである。なお、一昔前、まだインターネットが普及する以前には、パソコン通信、例えば Nifty のフォーラムなどが、そのような役割を担っていた。質問すると、有り難いことに数日の間に、複数の人々が回答を寄せてくれることが多い。回答の中には、ただ自分の経験を押しつけてくるもの、初心者対象の常識的なアドバイスの域を出ないものなど、あまり「為に」ならないものもあるが、

中にはこちらの報告を精査し、的確で有益なアドバイスをしてくれる人もいる。こちらもそれなりに経験を積んでいるので、「為」になるものと「駄目」なものは見分けがつく。「為になる」アドバイスを選びシステムをチェックし、それでも解決しない場合には、その人と意見交換をしながら、再チェックを重ねると、推理小説の犯人捜しのように、どんどんトラブルの要因が絞られて行き、やがて見事に問題が解決する。ネット社会の弊害が云々される昨今だが、見ず知らずの人々から知恵を授かることが出来るのは、ネット社会の有難さであろう。インターネットも、有効に活用すれば「為になる」ということである。

ところで、政治の世界ではどうだろうか、政治は人間社会を機能させて行くために必要不可欠なシステムではあるが、各々の政治家がどれだけ「為になる」ことをやってくれるのであろうか。

テレビ、新聞、街頭演説における政治家たちの発言は、「国民の為、国家の為、市民の生活を守る為」、ようするに「タメ、タメ、タメ」のオンパレードである。しかし、国民のタメ（為）というより、選挙のタメ（為）ではないかと疑いたくなるような発言、行動も多い。「選挙に勝たなくては政策を実行できないではないか」と言われればそれまでだが。

この２、３年、ギリシャの財政危機を発端にしたヨーロッパの信用不安が世界のニュースを賑わしている。ギリシャは 2001 年にユーロを導入し、しばらくは好景気に沸き、時の与党は国民の喜ぶバラマキ政策を行い、2004 年にはオリンピックも化開催した。ところが、国民が知らぬうちに、国家は巨額の財政赤字を蓄積していた。その結果、欧州諸国の監視下のもと、財政緊縮政策の実施を余儀なくされ、生活苦のため自殺者が出るような状況にあるのは、周知の通りである。

パソコン・システムのトラブルに対するアドバイスは、一見難しそうだが、問題が限定的なだけに、「タメになるもの」、「ダメなもの」の判別はつけやすい。しかし、政治は様々な要素が複合的に絡んでいるだけに、「タメ」、「ダメ」の判別はより難しかろう。　しかし、「タメ（為）を求めて、ダメ（駄目）を当て、切羽詰まって身動き出来ぬ」などという状況に陥ることのないよう、国民一人一人に、厳しく判別して行くための知恵を持つことが要求されよう。

（田脇 淳三郎）

読者の皆様へ

本誌では読者の皆様のご意見をお待ちしております。ご意見をお寄せになりたい方は最大1000字以内にまとめて、編集部に郵送下さるか、下記のメールアドレス宛にお寄せ下さい。

メールの宛先（中島洋一編集長）：　yoichi_n@wa2.so-net.ne.jp

Zwickauの第１６回国際ロバート・シューマンコンクールを聴いて（前編）

ピアノ　　深沢 亮子

私の生徒で、芸大の大学院生、五味田恵理子さんが、６月にドイツのツヴィッカウで行われる第１６回目のシューマン国際コンクールを受けに行くことになった。1956年以来４年おきに開催されるこのコンクールは、ピアノと声楽部門に限られており、期間は６月７日―１７日までとされている。五味田さんにとってヨーロッパは初めてであり、またドイツ語を大学の授業でとっているものの、殆どしゃべれないと云うことで、少々心細くなったらしい。5月初旬、彼女は誰か私の親しい知人で、その近くに住んでいる人がいないかどうかを聞いてきた。私も考えてみたが、なかなかそういう人はいなかったので「じゃ、私が行こうか」、という話になった。彼女は大変喜んだが、１０日余り家を空けるので、私はお留守番を探さなければならなかった。そこで弟夫婦に相談し、友人で丁度良い方が見つかり、お願いできることになったのでホッとした。

いつも頼んでいる旅行会社「ジャックラビット」に電話をし、すぐ往復の切符とホテルの予約をしてもらった。五味田さんは６日に出発し、私は１２日に中村静香さん(Vn.)とのコンサートがあったので、翌１３日に発った。飛行機はAUAで、成田発11.15時、ウィーン着16.00時、続いてAUAでの17.35時発でライプツィッヒへ、到着は18.50時と云うことだった。かねてより私はR.シューマンの生誕の地、ツヴィッカウに一度は行ってみたいと思っていた。以前フランクフルトからのバス旅行でアイゼナッハ、ワイマール、ライプツィッヒ、ドレスデンには行ったことがあったが、ツヴィッカウは汽車に乗り、不便な所にあると聞いていたので、なかなか出向くチャンスがなかった。今回は五味田さん、そして私にとっても充実した旅行になりそうだ。以下日記風に書く。

６月１３日（水）　晴。空の旅もウィーンまでは快適だったが、ライプツィッヒから来る飛行機が遅れ、ウィーンのエアポートで３時間近く待ち、ライプツィッヒには夜９時前に着いた。夜とは云ってもまだ大分明るく、タクシーでホテル”The Westin Leipzig”へ向かい、荷物を部屋に置き、すぐに徒歩５分のところにあるハウプト バーンホーフへ行った。明日は早朝に発つので、下見をしながら乗車券も買った。大きな駅舎で、１～２３番線位まであったと思うが、２階からすべての列車が出入り出来る様に作られている。分り易く整然としていていかにもドイツらしい。真ん中のエレヴェーター、エスカレーター、インフォメーションセンター等をはさんで左右さまざまなお店やレストランが並んでいた。

ホテルに戻りツヴィッカウの五味田さんに電話をかけると、彼女は明るい声で、一次はパスし、二次を弾き終え、明日の晩発表があるとのことだった。彼女は一次

でシューマンの練習曲 op.3-6 とショパンの op.10-4、メンデルスゾーンのプレリュードとフーガ op.35-1、シューマンの即興曲 op.5 を弾き、二次ではシューマンの幻想曲 op.17、ショパンの幻想ポロネーズ op.61、デビュスィーの半音階のための練習曲を演奏した。

６月１４日（木）　曇時々雨。肌寒い。朝食をすませ、９時１６分発の汽車に乗る。町の郊外を過ぎると緑の丘が見え、牛がのんびり寝そべっている。広々とした牧草地帯が続き、心が和む。時々、家々が見えるが、農家の空家が多い。車中ロシア人でハンブルクから来たという男性が「若い人は皆都会へ出てしまい、農家を継ぐ人がいない」と嘆いていた。11 時過ぎ、ツヴィッカウに到着。駅前からタクシーで町中にあるホテル”Achat” へ。運転手等、強いザクセン訛りでしゃべるので、時々聞きとりにくい。ホテルはコンクールの会場 「ノイエ・ヴェルト」のすぐ前で、一般のお客他、審査員やコンテスタント達が泊まっている。軽い昼食をすませ、前の通りを走る路面電車に乗り、ドームやシューマンの生家のある古い街並を歩く。こじんまりとした町だが、どのお店もなかなかきれいにしてあり、物価はライプツィッヒ等に比べるとお安い。今は円高だし、２年前ヨーロッパに来た時と比べると買い物もし易くなっている。Dom St. Marien は 1479 年に建てられたプロテスタントの教会だが、ここでシューマンは洗礼を受けたそうだ。教会の隣の赤い屋根、黄色に塗られた壁の家が彼の生家である。そこはシューマンハウスと呼ばれ、１４時から五味田さんが中のホールで練習をしていると聞いていたので入ってみると、彼女は協奏曲をさらっていた。五味田さんは日本を発つ間際までリサイタルや野島稔さんのコンクールがあったり、２週間余り休むので大学の授業を受けたりして忙しく、コンツェルトまでは手がまわらなかった様だ。私も日本では１楽章しか聴いていなかったし、今更ジタバタしてもと思いながらもシューマンハウスでレッスンということになってしまった。彼女はいつも前向きで明朗なお嬢さんで、この時も元気はあったが、やはり疲労が出たのだろう。歯や右手５指の先が痛み気の毒だった。コンクールに出場する殆どの人達はヨーロッパに住み、また留学中だが、彼女の様に直接日本からツヴィッカウまで受けに来るという人は余りいないらしい。それだけに何かと大変であるが、今回の様なさまざまな経験から聡明な彼女はきっと多くを学ぶことだろう。

ツヴィッカウのシューマンの生家前で

シューマンハウスには、資料館、１５０席のコンサートホール、そして博物館がある。６月８日生まれのR.シューマンを記念して、毎年この時期に音楽祭が開催される。幾らか地味ではあるが、町のあちこちにシューマンのサイン入りのポスターや旗等が見受けられた。R.シューマンの資料館は、シューマンの書簡全集を刊行しているし、シューマン夫妻の残した音楽的、文学的、自伝的資料の多くがここに有り、その内容は世界一と云われる。2階のミュージアムには自筆譜、使用した楽器、絵画等貴重なものが多く展示され、またシューマンの使用したステッキ、クララの日傘、石膏で作られたクララの手（かなりしっかりした大き目の手！）他、いろいろ見ることができる。シューマンの父親は出版業及び書籍販売業で名を成し、「ポケット文庫」を発行したことでも知られている。この家は1954年大洪水の折、全部が崩れてしまい、後に再び立て直したそうだ。記念館の近くにマークト広場があり、彼が若い頃通った学校、演劇場のゲヴァントハウス（市に余りお金がないのか建物は大分傷んでいたが）や彼の記念像等が見られた。夕食は五味田さんと近くのレストランですませ、ホテルに戻る。

シューマン博物館の中で
夫妻のレリーフを背景に

６月１５日（金）　晴。うすら寒い。朝、食堂で、ベルリンからいらした審査員、R.Hellwigさん（日本にも武蔵野音楽大学に長くいらした方で、私も以前からのお知り合い。Wien　のBeethovenコンクールの時もご一緒だった。）、パリからのY.Henryさん（奥様は日本人のピアニスト。横浜のご実家のサロンで演奏と公開講座をさせて頂いた時お目にかかった）と再会。またモスクワからのE.Virsaladzeさんにもお会いした。昨秋より野島稔さんのご紹介で、恵藤久美子さん(Vn.)のお嬢さんの、幸子さんが師事しているので、「私の生徒がお世話になっており有難うございます」と申し上げると、とても嬉しそうに笑われ、「みのる、みのる、私たちはオボーリンの元で一緒に勉強したのよ」と言われた。ヴィラサーゼさんはお偉く、外国も含めて４つの大学でレッスンをしておられ、とてもお忙しいので、幸子さんは３人の下見の先生に見て頂いている様だ。ヴィラサーゼさんの演奏はＣＤしかお聴きした事はないが、素晴らしいピアニストで、1966年シューマンコンクールでも１位をとられた。声楽部門の白井光子さんにもお目にかかったが、白井さんも1974年の１位入賞者でいらした。日本の方では、他にも米川幸余さんの２位、2000年の奈良希愛さん１位、2004年山本亜希子さん、他、ピアノ、声楽部門で数人もの方が受賞しておられる。今年の審査員、声楽の部で

は、かつてウィーンのオペラ劇場やコンサートで度々聴き感動したP.シュライヤー（心臓の大手術をされたそうで以前の様なお元気はなく気にかかったが）や、ソプラノのE.マティス等もいらしていた。審査員は各々９人ずつで、ピアノ部門ではドイツの方が４人、あと英国、ロシア、フランス、オランダからの方々だった。日本人で声楽部門を受けた人達は皆さん残念ながら一次で落ち、ピアノ部門では１０人のうち３人が通過（全体ではピアノ部門７０人程、声楽部門１１０人程が受けたそうだが）したが、本選には進めず。シューマンを中心に演奏するということはとても大変な事だと思う。彼の音楽は詩的で美しいだけではなく、知的な取り組みが必要で、曲全体の把握を心がけながら、その中にひそむ絶妙なハーモニーを生かし、繊細さと同時に大胆さ、情熱、自由なファンタズィー、それ等をすべて表出するための豊かな音色、当然テクニックも含めてだが、そしてピアノという楽器を超越した音楽を表現しなければならないのではないかと考える。何といってもやはり彼の音楽はドイツの音楽なのだ。声楽の場合はドイツ語の詩があり、その意味、ニュアンス、発音等、ピアノ以上に難しいのではないかと思う。

今日の午前中、コンテスタントにとって大変有意義だと感じたことがあった。それはピアノの審査員の先生方からホールのホワイエで一人ずつ各々の感想をお聞きすることが出来たからだ。そこにお出にならない先生や、そういうことがあるということを知らない学生さんもいたかも知れないが。五味田さんもヘルヴィッヒさん他４人の先生方から１次、２次の演奏に対する感想やご注意を伺い、私がそれを通訳したのだった。皆さんとても好意的で褒めてくださった所もあるが、曲のつかみ方、デュナーミク、Tempoの設定、アーティキュレーション、音の出し方、ポリフォニーや和声の動き等についてご親切に言ってくださり、彼女の今後の勉強の指針になると思われた。中でもデュッセルドルフからのC.Dürer先生の「コンクールよりももっと音楽を大切に」というお言葉が印象的だった。私達の学生の頃と違い、今では国内外共にコンクールが随分増えている。コンクールは、レパートリーを作ったり、公の場で自分自身を試したり、そこで良い友人達が出来たり、メリットは大きいと思うが、中ではあちこちコンクールを渡り歩く、という人もいる様で、やはりよく考えて勉強した上で受けるべきだろうが、五味田さんもこちらで日本人３、４人の良き友人達にめぐり合った様だが、これからもお互いに切磋琢磨してゆくことと思う。

夕方から声楽部門の３人の歌を聴く。その中に女性の伴奏者で素晴らしいと感じた人が１人いた。夜は７時よりピアノ部門の本選会を聴いた。ロシア、イタリーの男性、韓国の女性の３人で、皆a-mollの協奏曲を演奏。オーケストラはPhilharmonisches Orchester Plauen-Zwickau、指揮者はLutz de Veerという人だった。３人のピアニストは悪くはないが、特に良かったとは言い難く、オーケストラもまた指揮者の音楽的な印象も余り良くなかった。慣れていないのかリズムやTempo等の不安定さが耳についた。

６月１６日（土）　晴。夜はピアノ部門の本選会第２夜があり、日中は空いていたので、五味田さんを誘い早朝の汽車で、１時間半の場所に位置するドレスデンへ行く。まずレジデンツ城にてザクセン王家の財宝を見る。中に緑の丸天井で有名な場所があったが、余りに大勢の人が順番を待っていたので、それは割愛した。ザクセン選帝侯はポーランド王も兼ねていたフリードリッヒ・アウグスト一世（1670-1733）という人で、強王と呼ばれ、子供の頃はライオンの肉で育ったとか。このお城やツヴィンガー宮殿等、ザクセンに膨大な歴史的財産を残した。お城の中の宝石、それ等を散りばめた置物、珊瑚や象牙他、圧倒された。外のレストランで昼食をとり、後に入ったツヴィンガー宮殿も見事なものだった。そこの古典巨匠絵画館のコレクションは先の選帝侯とその息子のフリードリッヒ・アウグスト二世（1733-1763）の時に収集されたそうだが、２人共美術に造詣が深く、優れた鑑定眼をもっていたという。イタリア・ルネッサンス、オランダ・フランドルバロック絵画が中心だが、北方ルネッサンスのL.クラナッハ、スペインのムリーリョ、ギリシャのエル・グレコ等の絵もあり、ティントレット、ベロネーゼ、ジョルジョーネ、コレッジオ、ティツィアーノ、ラファエロ、ボッティチェリ、ルーベンス、レンブラント、フェルメール、デューラー等７００点も展示されており、とに角 凄い絵ばかりで、あと１日２日は時間がほしいと思った程だった。1945年、この宮殿や絵画館は連合軍の爆撃を受け、大きな被害を被り、またロシア軍に沢山の絵画を没収されたが、その後モスクワの調印で再び元に戻って来たそうだ。宮殿の近くには有名な「ゼンパーオパー」があるが、その日の切符は「すべて売り切れ」と入口に書かれてあった。

ツヴィンガー宮殿の前で
生徒の五味田恵理子さんと

ゼンパーオパー前で　五味田恵理子さんと

　私達二人は４時頃の汽車で、ツヴィッカウに６時前に帰ってきた。夜は７時より昨夜の続き、ピアノ部門の本選会。１人はクロアチアの男性、ヴィラサーゼのお弟子さんで、誰も文句のつけようがない程、秀れた演奏だった。次はベルギーの男性。とても音楽的で、すみずみまで細やかな神経が行き届いており、音自体もよく歌っ

ていた。昨夜から今夜聴いたピアニスト達は皆２２～２３歳位で若くこれからが楽しみだが、何人ものコンツェルトの伴奏をしたせいかオーケストラも指揮者も段々良くなってきた。

６月１７日（日）　曇。今日は最後の日だからと五味田さんと私はもう一度シューマンハウスに行きMuseumを見たり絵葉書を買ったりした。夕べ遅く入賞者が決まり、私の思った通り、１位はクロアチアのAljoša Jurinić、２位はベルギーのFlorian Noack、３位はイタリーのLuca Burattoで、ディプロムは韓国とロシアの人だった。また歌の伴奏で優れていた人として特別賞をMelania Inés Kluge（ドイツ／アルゼンチン）という人が受賞。（私が前の所で一寸ふれた人）この方は伴奏者としての特別賞だけでなく、聴衆賞を授与された。ほかに、イタリーのピアニストLuca Burattoさん、男性歌手のMauro Peterさんも聴衆賞を受けた。午後４時からシューマンハウスのホールで受賞式が行われ、私も参加した。声楽の人達は正装だったが、ピアノの人達はＴシャツやジーパンといったラフな格好で少し驚いた。

コンクール・コンサートが行われたノイエ・ヴェルトのオワイエで
五味田さん（右）私（隣）と日本人コンテスタント

夜はホテルで、五味田さんがこちらでお友達になった（１人は芸高以前からの友人）３人の日本人コンテスタントと私達２人でザクセン料理を頂き、後に入賞者のコンサートを聴きに行った。今夜はチケットが有料で３０EU近く。私の席は１列目だったので演奏者達の姿が良く見え、音もはっきりと聞こえた。ピアノ、声楽の３，２，１位の人達が各々順番に大体５分、８分、１５分位ずつ、最後のピアノコンツェルトは３０分位かかるので全部で２時間強のプログラムだった。声楽ではドイツ人で２２歳の女性、Anna Lucia Richterさんと、男性では、２３歳のスイス人、Mauro Peterさんが１位。２人共すでに豊かなキャリアがあると思わせる程、余裕のある歌唱だった。どの出演者も聴衆から熱狂的な、温かい心の込もった拍手を受け、私達聴き手もすっかり興奮し、幸せな時間を味わったのだった。　　（次号へ続く）

６月２８日　　（ふかさわ りょうこ）　本会代表理事

連載　音・雑記－ひなの里通信（49）　狭間 壮

――雨の午後に――

細い雨にけぶる庭を見ている。紫陽花の青の輪郭が、そのまま景色に溶けこんでしまいそう。「雨は真珠か　夜明けの霧か　それとも　わたしの　忍び泣き」白秋の詩句が浮かぶのはこんな時。感傷的な気分がつのってくる。

拝啓。・・・ペンが止まる。次が出てこない。遅れた返信への申し訳だ。雨に引かれての感傷が、思考の邪魔をするのだ。先ほどからあれこれ言葉がからまわり。

そういえば、「窓のむこう　昼下がりの小雨」の景色の中にいとしい人の姿を想い浮かべ、恋文をしたためる娘の心をつづる歌がある。由起さおりの歌う「恋文」だ。

「アズナブール　流しながら　この手紙を書いてます」と始る。詞は吉田旺、曲は佐藤勝。ラジオから流れてくるその歌の新鮮さに心引かれた。

アズナブールはシャンソン歌手。彼のレコードを流しながら、手紙を書く娘。その目の前の窓には、小雨の風景がしっとりと映る。

その娘は「夢二の絵の少女真似て　矢絣（やがすり）を着ています」というのだ。そしてその手紙は、「朝に夕に　貴方様をお慕い申し候」で結ばれる。アズナブールに、候（そうろふ）とくる。この「候」のアナクロニズム感が、なんとも新鮮な響きなのだ。

そして、「拙（つたな）き文を　読まれし後は　焼いて欲しく候」と念を押す。

こんなラヴレターをもらう「貴方様」って、どちら様？って確かめたくなる。ちょっとうらやましくもあって。40 年ほど前の話。私は 20 代の終りをあくせくしていたのだった。

安野光雅画伯の「逢えてよかった」―週刊朝日連載―に、次のようなエピソードが紹介されている。安野先生は、15 歳のころに初めてラヴレターをもらったという。差出人は高峰浩次という男性。ホモの関係！と早合点してはいけない。「昔の女性は異性に男性名で手紙を書いたのです」とある。男女 7 歳にして席を同じうせずの教えが幅を利かす時代であれば、それも合点がいくというものだ。それにしてもきゅうくつなことである。そして安野先生は、次のように続ける。「ラヴレターには、『この手紙は読んだら焼いてください。あなたがいな

ければいきていけません』などと書いてあった。」と。その後始末についてはふれてないが、この例でも分かるように、恋文の結びはだいたいにおいて、『焼いて欲しく候』となるものなのだ。後で恥かきたくないのは、誰れでも同じだから。

「焼いて欲しく候」と願っても、果たされなかった「恋文」が、後に公開されてしまうことがある。著名人のそれを集めてまとめられた「世紀のラヴレター」／梯久美子・著も、そんな一冊だ。

吾を忘れたかのような歌人斎藤茂吉の懸想文（けそうぶみ）など、ア然とさせられる。あの茂吉が？とりこになった女性への興味が湧いてくる。

もう時効と考えていいのか・・・、それにしても公開されることなど予想だにしなかったであろう茂吉に、少なからず同情を禁じ得ない。しかも茂吉は、その手紙の焼却を望んでいたのであった。

くだんの矢絣を着た娘は、封筒に宛名を書き終った。昼下がりから思いをこめて書き綴った手紙。あたりは陽がかたぶき、とうに雨もあがった。「窓を染める雨あがりの夕陽」に目を細め、娘はその手紙を胸にあて、一つ深いタメ息をつくのだ。

娘の心によりそい、あれこれ妄想にふける四半時、ついでに思い出したことがある。高校生のころ、3 人宛てのラヴレターの代筆を引き受けたことがある。3 人も同時に？数打ちゃあたるということでもないが、中味が同じで、宛名だけが違うという代物だ。結果は全敗！その 3 人は仲良しときたから、さあいけない。見せあって、バカ！となった。

友人も私もともに大恥をかいた。だいたいそのへんから引いてきた言葉をならべただけの心のこもらぬもの、全てが安直であった。で、この話はこれでおしまい。

さて雨は降り続いている。『恋文』の歌のついでに思い出した″若気の至り″に、センチメンタルな気分も失せて、現実に戻る。書きかけの先ほどの手紙。

拝啓・・・、そのあとの時候の挨拶・・・、儀礼的な手紙への返信だ。こんな時は安直なれど、先人の知恵を借りるに限る。手紙文例集が、役に立ちて候。

【筆者紹介】狭間 壮（はざま　たけし）：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中ＮＨＫ「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。

名曲喫茶の片隅から　　宮本 英世

〔第 30 回〕　風変わりな初演

演奏会のチラシ、宣伝ポスターを見ていると、時に「世界初演」とか「日本初演」と銘うった曲目を見かけることがある。作曲家が書いた曲を、初めて世に紹介します・聴いて貰います、という意味である。そう書かれていない大半の曲目も、一度は必ずそういう初演の日があった筈であり、作曲者にとっては記念すべき、また最もドキドキするひと時といってよいけれど、この初演をめぐっては、悲喜こもごも、古くから興味深いエピソードがたくさん残されている。

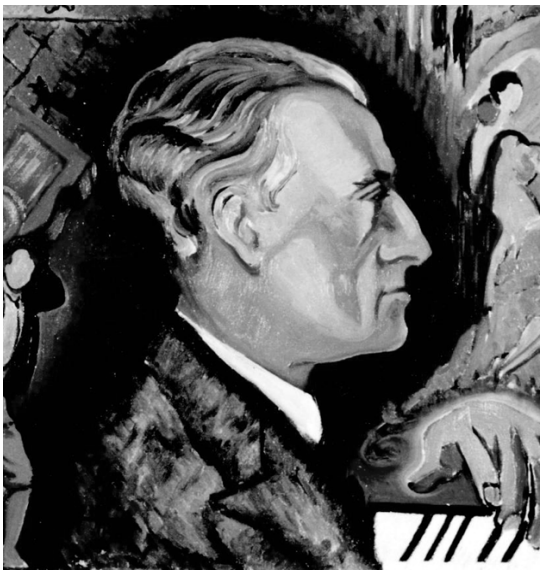
例えば、初めから成功を収め、そのまま名曲として私たちに伝わっている曲―ドビュッシーの「牧神の午後への前奏曲」とか、ガーシュウィンの「ラプソディ・イン・ブルー」、R. シュトラウスの歌劇「サロメ」、モーツァルトの歌劇「魔笛」など―がある一方で、初演の時には大失敗・不評をかったものの後から人気を獲得していった作品―ストラヴィンスキーの「春の祭典」、ヴェルディの歌劇「椿姫」、同じくロッシーニの「セビーリャの理髪師」、ビゼーの「カルメン」など―も少なくないこと。あるいは、現在考えても「一風変わっている」と思われるふしぎな初演もあったりして、一つ一つ掘りおこすと興味は尽きない。

そこで今月は、あれこれある初演の中から「風変わり」と思われる例を、二つほどご紹介してみよう。まず一つは近年再評価の人気作曲家、エリック・サティ（1866～1925、フランス）の「家具の音楽」（1920）という作品である。この曲の楽譜は永らく埋もれていて、発見されたのは 1979 年になってのこと。まだほんの 30 年ちょっとしか経っていないわけだが、反アカデミズム、反印象主義を掲げた反骨作曲家にふさわしく、作品そのものもじつに変わっている。つまり題名が表すように「コンサートなどで意識されて聴かれるものではなく、家具のように存在していても意識されない音楽」だというのである。

エリック・サティ（イラスト）

初演は 1920 年 3 月 8 日。パリのバルバザンジュ画廊という所で行なわれたが、会場では 3 つのコーナー（隅）にクラリネット奏者を一人ずつ、残るコーナーにピアニスト、特別席にトロンボーン奏者という配置で行なわれた。プログラムには、曲の目的

にそって「休憩中に演奏される音楽には、いっさい気をとめないで下さい」と注意書きを加えた。そしてコンサートが休憩に入ると早速、作曲しておいた「家具の音楽」を演奏させたが、しかしいざ始まってみると人々は席に戻ろうとし、お喋りを止めて音楽を聴こうとする。思惑が外れたサティはあわてて場内を駆け廻り、「さあ、さあ、お喋りを始めて！歩き廻って！聴くんじゃない！」と怒鳴りちらしたが、どうやっても効果がなかったという。確かにまじめに聴くほどでない、繰返しを中心にした断片的な小品の音楽。一部はCDでも聴くことが可能である。



モーリス・ラヴェル（絵）

もう一つは、モーリス・ラヴェル（1875～1937、フランス）の「高雅で感傷的なワルツ」である。現在では管弦楽曲として有名だが、もともとはピアノ曲。その初演は1911年5月9日に、やはりパリで行なわれた。独立音楽協会という団体が主催のこのコンサートでは、当時活躍していた8人の作曲家が新作を発表するというので話題となったが、曲目に付く筈の作曲者名が、なぜか記入されておらず、聴衆には題名だけが記された用紙が配られた。後から誰の作曲か、作曲者名を記入して下さいという、つまりはクイズ形式の初演が試みられたのである。こんな形は、もちろん初めてである。

「高雅で感傷的なワルツ」は、シューベルトの例にならって書いたという8曲のワルツ集だったが、ラヴェルは自作を参加させたことを誰にも知らせず、澄ました顔をして客席に並んでいた。取り巻き連中は、ピアニスト、ルイ・オーベールの演奏が始まると、「奇妙な曲だ」といってあざけり、あれこれの作曲家名を挙げて勝手な品定めを続けていたが、ラヴェルは少しも動じず、終始ポーカー・フェイスを守り続けていたとか。結局作曲家当ては、約半数がラヴェル、それに続いてサティ、コダーイ、デュポワ、セルヴァらの名が挙がったという。サティ、コダーイを別にすれば、大半の人が今日ではもはや埋もれてしまっている。

【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。

【連載】　**音盤奇譚**　板倉 重雄

第 35 回

フォーレの「ヴァイオリンとピアノのための子守歌」

少年時代に愛聴した LP に「栄光の巨匠たち 1000 弦楽器奏者編」がある。戦前の巨匠たちによる名演奏を LP に復刻する東芝 GR シリーズのサンプラー盤で、１枚千円だったこともあって発売後すぐに入手した。クライスラー、カザルス、エネスコなど大芸術家たちが次々に現れて得意の１曲を披露するような楽しい LP だが、私の心に最も響いたのはティボーとコルトーが 1931 年に録音したフォーレの子守歌だった。この美しい作品を聴くのが初めてだったこともあったが、憧れへの飛翔のような演奏の虜になってしまったのである。ピアノの分散和音に乗ってティボーが柔らかな音色で旋律を歌い出すと、もう胸を鷲掴みにされていた。そして、中間部の高弦で高まる部分になると、涙がこみ上げてくるのを止めることができなかった。以来、何度この演奏を聴いたことだろう。情熱的な表現と早めのテンポがすっかり身について、他の演奏を受け入れることができなくなっていたのである。

５月 22 日、日本フォーレ協会の演奏会にジェラール・プーレが出演するというので聴きに出かけた。前半フォーレ、後半ドビュッシー、ピアノ曲や歌曲も含んだプログラムで、プーレが前後半の最後でソナタを担当した。前半フォーレのソナタ第１番を弾いた後、プーレは聴衆の拍手に応えて「ベルシューズ」と一言。フォーレの子守歌を弾き始めた。私は LP によるティボー体験以来の金縛りとなった。ミュートを付けたプーレの音は聴こえるか聴こえないか位の、淡く弱いもので、まるで母親が子供に子守歌を囁いているようなのである。

テンポもティボーと同じで早めであり、音の淡さといい過ぎ去る時間の早さといい、儚い夢のような表現だった。プーレは後半ドビュッシーのアンコールにもミュート付きの「美しい夕暮れ」を弾いた。丁度その４日前に見た一際美しかった夕暮

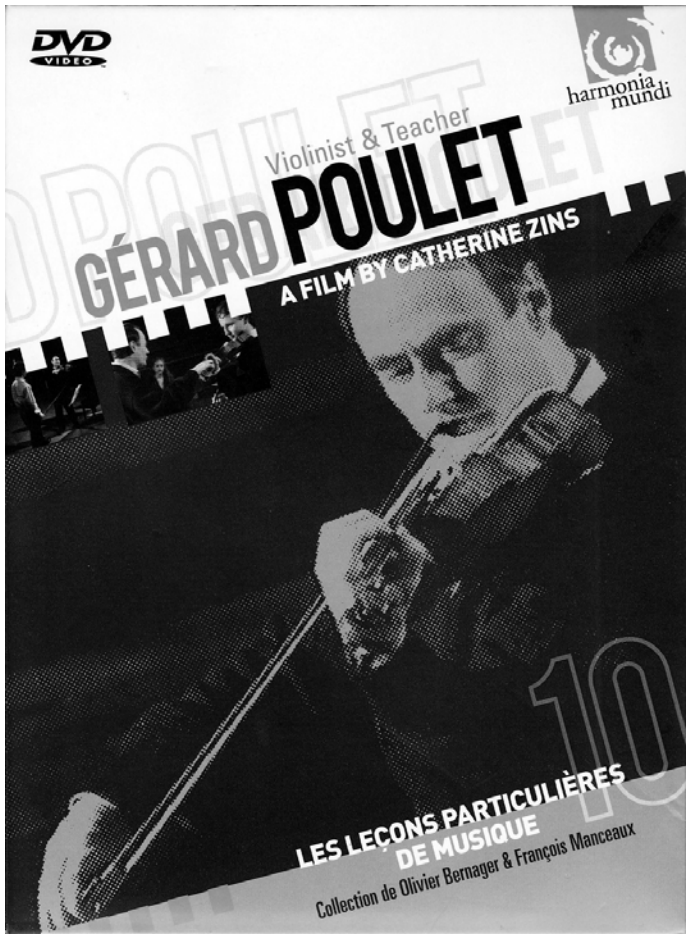
れのような薄紫色の淡い色彩を放つ音、その儚い美しさを見て感動する心を映したような演奏だった。

●栄光の巨匠たち 1000 弦楽器奏者編（クライスラー／ウィーン奇想曲、カザルス／ベートーヴェン：メヌエット＆シューマン：トロイメライ、ティボー／フォーレ：子守歌、エネスコ／ショーソン：詩曲、ブッシュ／バッハ：シチリアーノ、シゲティ／バッハ：アリオーソ、デ・ヴィート／バッハ：シャコンヌ、ヌヴー／スーク：4 つの小品～2 曲）

［東芝 EMI　EAC1005（LP 廃盤）］

1979 年 1 月に発売された GR（Great Recording）シリーズのサンプラー盤。アーティストと曲目の選定が素晴らしい。私が戦前の名演奏に親しむきっかけとなった LP である。

【写真：前ページ】



●ジェラール・プーレ／ルソン・パティキュリエ（個人レッスン）

［仏 HMF　HMD9909038（DVD）］

1989 年に放送されたフランスのテレビ番組を DVD 化したもの。ドビュッシーのソナタやイザイの無伴奏ソナタ第 2 番などのレッスンと演奏シーンが収録されている。【写真：右】

【板倉重雄氏プロフィール】1965 年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994 年 HMV ジャパン株式会社に入社。1996 年 8 月発売の CD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009 年 9 月、初の単行本「カラヤンと LP レコード」（アルファベータ）を上梓。

私と、ラジオ・ドラマ

連載第２回　　作曲　助川 敏弥

現代のテレビ時代の人はラジオ・ドラマのことをよく知らない人が多いのではないだろうか。

テレビ・ドラマと違うラジオ・ドラマの特性とはなんだろうか。

一番の大違いは、当たり前のことだが「映像」がないということである。言い換えれば、目が参加せず、すべて耳が相手になるということ。これが音楽にとっていかに難しいことを意味するか。映像があれば、音楽は視覚とは違う受け入れ口の聴覚を相手とするわけだから、大音量で盛り上がることは遠慮なくできる。劇的な場面で交響的な高まりも幾らでも出来る。しかし、耳だけが相手の世界ではそれができないのである。あくまで主体である声優の演技をさまたげるわけにいかない。当然、大音量の高揚はできない。それだけではない。音量も抑制される。その結果、音量レベルを下げると、中音域以下、低音域の音は聞こえにくくなる。はじめ私はこのことにいらだちを覚えた。先日再会した竹内さんは、編集の時、私の音楽の場合は、低音域も聞こえるようにせよと技術者に指示したそうだ。しかし、それは私の方の認識不足と不勉強であった。つまり、ラジオ・ドラマでは中音域以下の音は使えないのである。そのことを悟って以後、私は、中音域から上だけを使うようになった。

ラジオ・ドラマでの音楽は三つの種類に大別される。

1.　ブリッジ。ある場面の締めくくりをつくる音楽。約 15 秒の短いもの。

2.　コード。これは更に短い。5 秒程度、ほとんどひとつの打撃音が fade out するだけのもの。場面転換の役をする。

3.　BG。back ground、日本語でもビー・ジーとして最近は使われる。これは長い。短くて 1 分、長いものでは 3 分、4 分以上続く場合がある。

この三つの種類の中で、1 と 2 は音楽というよりその断片のようなものだから、音楽としての実態と持続を持つものは 3 の BG. ということになる。付け加えるが、文中いままで、「ラジオ・ドラマ」と称する番組を扱ってきたが、ドラマのほかに「物語」-「ものがたり」-という番組もある。一人の語り手が物語を朗読するものである。これも文芸ものである。これにも音楽が付随するが、役割と種類は上記の三種類と同じである。このほかに、タイトルと配役等をアナウンサーが紹介する「オ

ープニング」がある。これは第三種のBGの中に入れてもいいだろう。これは劇の内容を予告するものだから慎重に作らなければならない。

この第3種、〈BG〉の扱いにラジオ・ドラマ音楽の活躍の場がある。聴覚しか場がなくて、声の演劇をさまたげてはいけないのだから、いきおい、背景状況を描写暗示するか、人物の心理を、暗示、表現することが役割となる。そのために、現代音楽の先端的表現や語法がここで使えることがある。しかし、この場合の危険は、あまりに、通称「現代音楽」的、心理的な音楽表現は、音楽としての持続性があやしくなることである。音の断片の表現になるので、息の長い持続の上でゆったりとした継続的、叙述的表現、情景的、描写的表現はあやしくなる。このことに気がついたのは、私がかなりの経験を積んでからのことであった。

BGの音楽を作るについては、当然ながら、音楽がつけやすいものと、つけにくいものがある。なんらかの意味で情緒的であるものがつけやすい。文芸物の場合でも、思想的、論述的なものは音楽はつけにくい。マルタン・デュガールの「ティボー家の人々」がラジオ・ドラマ化されて放送されたことがあった。長編であるから、二回か三回くらいの連続ものだった。最近亡くなった先輩作曲家の別宮貞雄さんが音楽を担当した。これはいかにも音楽がつけにくそうだった。オルガンを主体にした「オープニング」で始まっていたが、タイトルの部はともかく、途中のやりとりは情緒的場面が少なく、苦心のあとが見えた、ただしくは、そう聞こえた。

私の経験の中で自分が最も気に入っているものの一つに、幸田文の「笛」という作品があった。人妻への淡い慕情を独身男性がそれとなく、友人である当の人妻の夫に、別の話に例えて物語る場面であった。箱根の芦ノ湖の舟の上での場面であった。湖の波が静かによせるようなさびしい告白だった。私はここで、ハープの静かな三連音符の上にヴィオラのソロの長い旋律を置いた。劇的効果はとても良好で、私自身いまも気に入っている。音楽はややフォーレに似ていたかもしれない。

この「笛」というドラマ。名制作者であった平野愛子さんの仕事であったが、あとで、テープを借りに行ったら、テープが行方不明になったとのことだった。こんなことは例がないことだが、探しているが見つからないとのことだった。この放送は自宅で録音することを忘れたので音源はない。

（すけがわ・としや　本会　代表理事）

作曲家と即興演奏　　夢音見太郎

昔も今も、作曲家にはピアノの演奏に秀でた人が多いようです。それは、ピアノが同時に音を沢山掴める楽器であり、一人で音楽の全体構造を把握するのに便利であるため、音楽を勉強する最初の段階から接する機会が多い楽器であるからと思います。オルガンも音を沢山掴むことが出来る楽器ですが、パイプ・オルガンとなると、普通の人では、触れる機会がそう多くはありません。終戦後しばらくは、ピアノが庶民にとって高嶺の花だったため、子供達にリード・オルガンを買い与える親も多く、旧世代の方々の中には、リード・オルガンで音楽の勉強を始めたという人も結構いらっしゃると思います。足のペタルを踏んで空気を送り、リードを鳴らすのですが、ボリュームは金具をモモで押して調整していました。私が子供の頃、我が家も、まずオルガンを購入しましたが、ピアノを習っていた姉がオルガンでピアノ曲を弾くいていると、音域が狭く、鍵盤が足りなくなります。それを見ていた叔母に、「可哀想だからピアノを買ってあげたら」とアドバイスされた母が、父にせがみ、中古のドイツ製のピアノを買わせました。88 鍵あるちゃんとしたもので、それが片田舎名の生まれ故郷の町の民家では、最初のピアノでした。

ところで「ピアノの演奏にかなり秀でた人が多い」と書きましたが、もちろんそうでない人もいます。

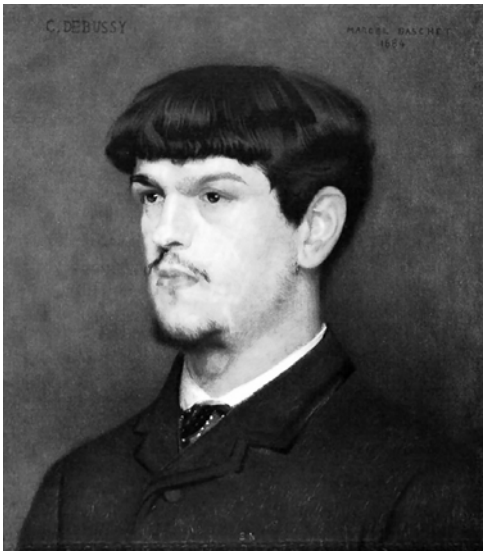
例えば、エクトル・ベルリオーズ(1803-1869)は、フランス南部のラ・コート＝サンタンドレという小さな町に生まれましたが、その町にはピアノは１台もなく、ベルリオーズが青少年時代に触れた楽器は、フルートとギターだけだったようです。ところで私の生家ではピアノを買ったにも関わらず、私は殆ど指の練習をせず、気が向いた時に即興演奏などをして遊ぶだけでした。そのため、音楽の道を目指そうと決意した頃もピアノが不得意だったので、ピアノが弾けなかったベルリオーズに親近感を抱きました。ワグナーも指の練習が嫌いだったため、ピアノ演奏は上達しなかったようですが、長じてベルリオーズは管弦楽法の達人となり、ワグナーは「ワグナー対位法」と云われることもある多声部技法を網出し、楽劇という総合芸術を確立します。ベルリオーズ、ワグナーとも、ピアノの魔術師と云われたリストとも親しく、お互いに才能を認め合っていました。二人ともピアノ演奏ではリストにまったく敵わなかったでしょうが、管弦楽法ではベルリオーズの方に長があり、多声部技法の面ではワグナーの方が優れています。また、二人とも卓越した指揮者でもありました。人は弱い部分があっても、才能と努力により、それを克服して行くことが出来るということでしょうか。

即興演奏の名手たち

リスト、ベートーヴェン、ショパンなどは、ピアニストとしても超一流でしたが、作曲家の場合、単に出来上がった曲を演奏するだけでなく、即興演奏に秀でた人が多いようです。ベートーヴェンが若い頃ウィーンに移住し、まず、即興演奏の名手として名声を博したことは良く知られていますし、ショパンは病気持ちということ

もあってか、「あまり弾きすぎると感性が摩耗してしまう」と言って、一日に３時間程度しかピアノを弾かなかったと弟子が語っていますが、その半分近くの時間を即興演奏に費やしていたようです。また、ショパンの楽曲には、いたるところに華麗な装飾音型が散りばめられていますが、ショパンは弾く度に違った装飾音型を弾いたそうです。ですから、楽譜として残されているものはその中のほんの一例といってよいのかもしれません。

シューベルトは演奏技術の面では、それほど達者ではなかったようですが、ピアノに向かうと好んで即興演奏をしたり、即興で弾き歌いをやったりしていたようです。彼は美しいテノールの声を持っていたようです。作曲家でありピアノの達人という例は多く、今でも色々な作曲家の自作自演録音が残されています。しかし、美声を持つ作曲家としては、リヒャルト・シュトラウス、レーヴェなどの名が挙げられるものの、そう多くはないようです。一般的に作曲家という人種は、不規則で、あまり健康的でない生活をしているからかもしれません。



ドビュッシー（1884 年の肖像画）

ところで、ドビュッシーにも触れてみましょう。

チャイコフスキーのパトロンだったフォン・メック夫人（1831-1894）が、チャイコフスキーに送った手紙の中に「即興演奏が出来るピアニストを紹介して欲しい」という要請を書いたものがあったと記憶しております。しばらくして、メック夫人は、ごく若かったドビュッシーを自分の娘のピアノ教師として雇い、また夫人の長期旅行に同伴させています。ジュルジ・サンドがショパンの即興演奏を楽しんだように、彼女も若くて才能豊かなドビュッシーのファンタジックな即興演奏を楽しんだことでしょう。豊かな芸術的感性を備えた女性にとって、才能豊かな男性作曲家の心と指から渾々と湧き出る芸術を独り占め出来る時間は、まさに至福の時だったのではないでしょうか。しかし、そのドビュッシーは彼女の娘と恋愛関係に陥り、怒った彼女はドビュッシーを解雇してしまいます。

作曲家の耳

では、即興演奏はどのように生まれて来るのでしょうか？
即興演奏をする場合、それほど複雑な音楽でない場合でも、旋律線と、バスライン、和声が同時に頭に浮かんで来る必要があります。旋律だけ浮かんで来ても、和声を伴う即興演奏は出来ないのです。

では、もの凄く良い耳を持っていないと即興演奏は出来ないのでしょうか。確かに、ある程度良い耳を持っている必要はあるでしょうが、一概に「よい耳」といっても、色々あります。むしろ、一つ一つの音を物理的に正確に捉える能力というこ

とになると、ピアノや絃楽器を専門に勉強する人の中に、非常に鋭い能力を持つ人がいます。

ここで、ちょっとした例を上げてみますが、某国立の音楽大学では、ソルフェージュの授業時間に、年に数回聴音の書き取り試験を行っていました。その課題の多くは先生方が作成したオリジナルですが、希に既成曲を課題として使うこともあり、ある時、バッハの平均律クラヴィーア曲集の中からフーガの一部が課題になりました。試験が終わった後、先生方で協力して採点をします。上級グレードのクラスなので、大体は書けているのですが、時々、h(B♮)と、Ais（A♯）の音が重なったりしているのです。先生方の多くが作曲科出身なので、「こんなことが音楽的にある筈ないじゃないか、一音一音、横に聴いて書いていて、縦に聴こえていないんだな」などという評が飛び交いましたが、即興演奏をやるためには、難しい課題をじっくり時間を掛けて一音一音正確に書き取る能力より、先生が即興で弾いた音楽的断片を、すぐ模倣反芻し、間髪を入れずその後に音楽を続けるような能力の方が重要なのです。私は学生には、音を一つ一つ捉えるのではなく、音楽の形を捉える能力、即ち「音楽の姿」を見渡す能力が必要という言い方をしていました。

私などは、メロディーとバスと和音が同時に浮かんで来て、それを音楽にするといった程度の能力しかないのですが、バッハはフーガの即興演奏の達人だったそうですし、昔のパリ音楽院の作曲クラスには、フーガの即興演奏という課題があったようです。わたしにはとても出来ませんが、それをするには、楽譜を経ずに頭の中に多声部の音楽の形を立体的に組み立て、それを演奏して行くという連携作業が必要になります。

調性による難易度について

和声の授業で学生に四声体を教えていると、調号の少ないハ長調の課題は比較的良く出来るのですが、変ニ長調、ロ長調となると急に出来が悪くなります。半音違うだけだというのに。また、すぐ耳で憶えられるような簡単な音楽をハ長調からヘ長調に移調させると、なんとか出来ますが、ハ長調から嬰ヘ長調の移調となると殆どの学生はお手上げです。それで、ピアノ科の学生達には「ショパン、シューマンは、何調でもハンデなしに同じように弾けたと思うよ」と言いかせませたが、憧れのショパン、シューマンを例に出されると、さすがに学生達には応えたようです。「ショパン、シューマンが何調でもハンデを感ぜず弾けた」ということは、決して私のデッチ上げではなく、間違いない事実でしょう。即興演奏をしていれば、満遍なく色々な調を通りますし、音楽の形が見えれば、何調でも難易の差はない筈です。何調でも自由に弾けるという能力は、才能といった次元の問題ではなく、単なる慣れの問題で

しょう。ショパン、シューマンだから出来た、というようなことではないのですが、教育の場では、このようなアジテーションも時には効果的に作用する場合があります。「音の姿が見える」「音の形を組み立てる」ということは、古典的な調性音楽にしか当て嵌まらない原則ではなく、無調や、その他の様式でも当て嵌まると思います。音の姿、形がそれぞれの様式によってすこしずつ異なるでしょうが。

演奏家と即興演奏

少々堅苦しい話しになってしまいましたが、即興演奏の楽しさは、自分のその瞬間の感性からほとばしり出たものを、すぐ音に出来るところにあります。心の中にある「音の姿を捉える」ということは基本ではありますが、音にしてみたら、自分の心で捉えていた筈のものと違っていたとしても、それはそれでいいではありませんか。そこから、また新しい音の姿を求めて、弾き続けてみればいいのです。

作曲家が演奏家を兼ねるのが当たり前だった時代には、即興演奏は一般的な表現手段でしたが、演奏家が作曲家と分離し、演奏の専門家が多くなった現代では、クラシックの演奏家で即興演奏を行う人は少なくなったようです。特に我が国ではそういう傾向が強いようです。それに対して、作曲と演奏がクラシック部門ほど分離していない、ジャズやポップスの世界では、演奏家が即興をする機会は珍しくはありません。

最晩年のルービンシュタイン

しかし、人前で即興演奏をするクラシック演奏家は多くないとしても、気分転換に一人で即興演奏を楽しんでいる演奏家は結構いるのかもしれません。私はそれでも良いと思います。それは指の訓練にはならないかもしれませんが、自由に自分の音と戯れる時間を持つことは、その人の演奏に生気を与えることに繋がると考えるからです。

大分昔のことですが、90 才になり引退したアルトゥール・ルービンシュタインの自宅を NHK が訪れ取材したテレビ番組が放送されたことがありました。「何か弾いてくれないか」という記者の要請に対して最初は渋っていましたが、しばらくして自らピアノに向かい、自分の意志でゆっくり弾き始めました。それはショパンの音楽を思わせるような即興演奏でしたが、和声が美しい深く味わいのある音楽で、ピアニストの人格と音楽性が聴き手の心に染みこんで来るように伝わる演奏でした。それを聴いて、彼にはショパンの音楽の魂と形が、その影にいたるまで、よく見えているのだと感じました。

（ゆめおと・みたろう　音楽戯作家）

随想

西洋演歌

今朝（数年前のことである）、通勤の車の中でラジオを聴いていた。美しい（ほんとうに綺麗な声でした）女声でシューベルトのアベ・マリアが聞こえてきました。しかし何かおかしいのです。私の知っているこの曲の楽譜にはない装飾音が挿入されているのです。日本風に言えばいわゆる＜こぶし＞のようなものです。少々こってりとした日本の演歌で聞こえてくるような節回し（旋律あるいは装飾音というより節回しと言う表現がピッタリという感じでした）です。声は艶があり綺麗なのですが、発声というより声の出し方が首から上だけで、芯がないのです。伴奏もピアノ（オケも入っていたように思いました）でしたが、原曲にあるような美しいアルペジオはありませんでした。シューベルトに続いてヘンデルとサンサーンスの有名な歌曲が流れましたが、どちらもアベ・マリアと同様、変わった演奏でした。曲が終わって、どういう演奏家なのか興味を持って聴いていると、ただいまの演奏は「ヴォーカル：ｘｘｘ、指揮：ｘｘｘｘ、ロンドン交響楽団でした。」と言うではないか。普通クラシックの世界では、歌い手を紹介するときに、《ヴォーカル》とは言わず、声種、たとえば《ソプラノ》、《テノール》という。《ヴォーカル》と言う時はたいていポピュラーソング（西洋流行歌）やジャズの場合になります。

最近、ポピュラー歌手がクラシックの名曲（誰でも知っているような歌ばかりで、ちょっと聴いただけでは専門家しかわからないような歌は、名曲でもほとんど歌わない）を歌うのをしばしば耳にする。古くからあったのだろうが、比較的頻繁になったのは、アメリカのスポーツイベントで米国国家を人気ポピュラー歌手が歌うようになってからで、その後オリンピックの開会式などにクラシックの曲が歌われるようになったのだろう。

この傾向が良いとか悪いとか言う問題は別にして、私にはかなり変な感じがした。適当な例ではないかもしれないが、お刺身にソースをつけたような感じ、モーニング（西洋の礼装）に下駄を履いて神社にお参りするような感じ、とでも言えば良いのであろうか、なんとも奇妙で、乗り物酔いにでもなったような気持ちがして、ラジオを消してしまおうかと思ったが、食わず嫌いと言われないように刺身にソースとマヨネーズ入りの辛子をつけて食べてみることにした。その結果、嘔吐はしなかったがお世辞にも美味いとは言えなかった。

この歌をオーケストラ用にアレンジしたのは誰だか知らないが（放送の始めにあったかもしれないが、私は途中から聴いた。演奏後には編曲者の名前はなかった。）演奏していた楽団は、（私の聞き間違いでなければ）名の知れたオケだった。

この味に慣れ、美味しいと感じるようになることがあるのだろうか。

邦楽と洋楽の混合、ハイブリッドと言うほどのものではないとは思うが、クラシックとポピュラーの混合は何とも難しい。この放送の後で、ポピュラーの名曲を日本

が世界に誇る現代音楽の作曲家・武満徹がアレンジしたギターの曲が放送された。演奏も良く、聴き応えするすばらしい音楽であった。先のアベ・マリアと比較して、格段の違いであったのは、編曲者の腕の違い、演奏者の程度の違いであったのは言うまでもない。それにもましてアベ・マリアの後に、そういった音楽を放送したり演奏したりする機会を設定したプロデューサーの意図を明確に感じたのは私だけだったのだろうか。

音楽に限らず、文化そのものではなくて、その中で完成された作品の輸入・編集（編曲）・翻訳などは難しい。同じ文化圏の中でさえ、時代が変化すれば価値観が変化する。時代を超えて通じる美意識は必ずしも多くはない。まして異文化の理解は極めて困難だ。特に多様化、交流域の拡大は、文化、価値観の違いがぶつかり合う機会を増大させている。自分と異なった価値観を認めないことは現代社会の中では正しいと言えまい。それを乗り越えたところにしか、世界に受け入れられるものはあり得ないだろう。混合することではなく、相手を認めることが必要なのではないだろうか。

（濁実堂）

★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆

訃報　畑中良輔氏　（６月号の訃報記事の続編）

５月 24 日、我が国クラシック音楽界における偉大な先駆者を失った。畑中良輔氏といえば、まず、「魔笛」、「フィガロの結婚」、「ドン・ジュバンニ」などの日本初演において主役を歌ったバリトン歌手として知られている。二期会の創設にもかかわり、新国立劇場の初代芸術監督をつとめ、日本のオペラ会の大御所的存在であった。多才な人で、作曲、音楽評論、指揮活動の他、詩作にも手を染められ、その詩をもとに我が国の優れた作曲家達が、歌曲を作曲している。2007 年に「繰り返せない旅だからシリーズ」（３）『オペラ歌手誕生物語』で、日本エッセイスト・クラブ賞を受賞しているが、これは、シリーズ（４）の『オペラ歌手奮闘物語』で完結している。

その他、声楽を学ぶ学生達の定番になっている『ドイツ歌曲集』、『イタリア歌曲集』、『オペラアリア集』、『トスティ歌曲集』など、多くの歌曲集を編集出版しており、筆者も多くの歌曲集を教材として使わせてもらっている。もっとも新しい刊行物としては、音楽の友に掲載されたエッセイをまとめた『荻窪ラプソディー― ブル先生の日々是好日』が７月 13 日に発売される予定となっている、氏は、我々の世代からみても雲の上の存在であったが、音楽、特に声楽を学ぶ若者たちにとって、あたかも空気のように、日常的にその業績の恩恵を受ける存在でありつづけるであろう。　（文責　本誌編集長　中島洋一）

福島日記（11）

作曲　小西 徹郎

もう早いもので前期の試験の季節になった。２年生は就職を視野に、１年生はその姿を見ながら自分自身と向き合う、そういうことを普段から感じるようになってきた。私はアンサンブルやソルフェージュ、イヤートレーニング、制作、そして音楽にまつわる「音楽の外側」の話をする授業などを受け持っているのだが、その中でも一番重要なのは「音楽の外側」の授業だ。音楽が社会の中に仕事としてかかわっていけるためには今の時代はとても厳しい。音楽は形のないもの、という捉え方をされていることを常に感じる。実際、映像やデザインも音楽もＰＣに収まってしまうものは「お金」にならない、そういうところに落ち着いてしまっているのだ。それでもなお、音楽家を目指す者は後を絶たない。音楽家を目指す者は夢と希望を持って「音楽を見続けて」入学してくるのだ。

「音楽の外側」では世の中の流れ、特に業界の流れやメディアの流れを切り口に学生に質問を投げかけながら音楽を仕事にするためのことを問い詰めていくもの。ほとんどが、どうやっていい音楽を書くか？というところにしか視点がないのが通常である。もちろん、いい音楽を書くことは当然重要なのだが、そこから先で多くは煮詰まってしまう。

たとえば、「あなたが曲を書いて録音もしてＣＤをパッケージしました。どうやって販売しますか？」という問いには「アマゾン、itunesなどに登録をして流通させてあとは告知のためにライブをやって手売りをしていく」と考えている。「では、ライブはどのように行いますか？」という問いには、「フライヤーを作成して近隣に置かせてもらってネットで告知をして動員をはかる」という答えだ。ライブハウスという「フィジカルな生の媒体」は確かにＰＣの世界よりかは伝達能力は優れているが、数多く伝えることができない。そういう状況でライブを１００回２００回やったとしても決して広がらないだろう。では、どうすれば早くこのスパイラルから抜け出すことができるのか？など、そういうことを学生と話しながら問答を繰り返す。

今、音楽がこんなに安くなってしまって音楽を売るということが困難になっている中でＣＤ盤を売ることは困難を極めるであろうし、メジャーや大手企業とのタイアップ企画を行っても分岐点を越える売り上げにはなかなか届かないのが現実なのだ。とはいうものの、少し前の統計によれば全

世界で日本はＣＤ盤の売り上げ金額は一番だった。確かに仕掛けということもあるだろうが、数字の結果としてＣＤ盤は世界一販売している。そのために世界中から日本は大きなマーケットと見られる。ただ一極集中していることを多くは予測していない。可能性を見つめていくこととはどういうことなのか？どこに視点を持ってお金にしていくのか？そのためにはＣＤやダウンロードという枠を超えていかなくてはならない、そしてそこにはコラボレーションもあるだろうし「他分野とのアンサンブル」もあるだろう。また多くはメジャーデビューを果たせば何とかなると考えているけれど、メジャーからリリースをしてもペイできなければどうにもならない、つまり「食えない」だとしたら自主でリリースして利益の幅を上げる、だが、利益云々よりも利益に届くための絶対金額を満たすことは非常に困難であろう。音楽にある様々な逆境をどうやって乗り越えていくのか？このことを具体的行動レベルで計画していくことがとても大切なのだ。

私も以前そうだったのだが、どうしても「いい音楽を作ればきっと！」という希望を持って目指してきた。ところが若い頃はその外側にあるもっと重要なことに気づくことができなかった。ただ、当時、前衛と呼ばれるもの、実験と呼ばれる音楽やアート、ここにも夢があった。それは池袋ART VIVANTがアートの最先端基地として存在していたからだ。ただ、今はその影はない。こうした時代の流れからアートには夢がどんどんなくなっていった。

今音楽をやっていく上で大切なのはトレンドとしてあるＣＤの売り上げダウン、ダウンロード販売による単価ダウンなど大きな変化に対してどのように音楽を提供していくか？ということだと思う。そのことをビッグビジネスのサイドでも個々のミニマムなところでもアイデアを出していかなければならない。その視点を音楽の外側から学ぶことが自身の助けになると信じていつも講義している。

学生にとってはとても厳しい話であるし、話をきいているだけで落ち込むこともあるだろうが、現実を見据えて、自身を見極めて、そして自身を社会に発見してもらうためのことをこの講義から学んでほしいと願う。今回は福島日記と銘打っておきながら内容は少々福島から離れてしまったが、今私が福島の現場で常に学生に伝えていることなのだ。私は学生の誰一人として取りこぼしたくない、そのつもりで講義をしている。

（こにし・てつろう　作曲会員）

現代音楽見聞記（15）2012年3月

音楽評論　西 耕一

未曾有の大災害から１年。あの日を過去のものとできず、現在も我々は苛まれ続けている。筆者の祖母も１年を耐えたが３月１日に87歳で逝った。昨年から今年にかけて続く訃報も精神的ストレスが一因であろう。安心して日々を過ごせるようなりたい。

1日は、トーキョーワンダーサイト渋谷にてアレクサンドラ・カルデナスによる箏吉村七重、リコーダー鈴木俊哉の公演へと予定していたが、祖母急逝でキャンセル。4日、日本音楽集団の定期は協奏曲特集も葬儀で行けなかった。安達元彦、川崎絵都夫、秋岸寛久、高橋久美子、福嶋頼秀の曲を取り上げて津田ホールを満員とのこと。7、8日はJFCアンデパンダン。特に8日は奥慶一のヴァイオリンソナタやロクリアン正岡の狛犬物語等に興味を唆られたものの、東フィル黛敏郎個展が重なった。8日オペラシティ、9日サントリーで広上淳一指揮、東京混声合唱団によるトーンプレロマ55、饗宴、BUGAKU、涅槃交響曲。東京での黛個展としては同演目の岩城宏之と東フィルによる2003年2月26日以来。今回は二夜、同演目を違うホールで聴き比べもできた。プログラム冊子には黛の作品リスト、年譜、論文が20ページ以上掲載。定期でここまでの思い切った企画は類を見ない。戦後の復興と高度経済成長の時代に作曲されたということもあろうか、黛と交友も深かった岡本太郎の「芸術は爆発だ！」を想起する凄まじいエネルギーの奔流で、3・11から約1年の「祈り」だけでなく、復興への前進を意識できるダイナミズムを体感できた。9日オペラシティの湯浅譲二作品演奏会IIIは毎年湯浅個展を続けるアンサンブルコスモスによる新作ピアノ四重奏のプロジェクション初演もあった。10日は早稲田大学を出てブレーンに就職した若手作曲家の細木原豪紀個展もあった。11日BSにて東京文化会館50周年オペラ黛敏郎「古事記」放送。

12日**「動き、舞踊、所作と音楽」**は日本音楽舞踊会議の特色を活かしたアッパレな公演。音楽の演奏だけでなく、ダンス、舞踊、演技など体技を伴う。声明、ダンス、器楽が入り乱れ舞台狭しと空間を創出する浅香満曲、地下クラブで聴くような独特な世界を垣間見せた小西徹郎のトランペットソロ、お笑いコントかアングラ劇かと観客を疑問符だらけにする清道洋一曲、橘川琢の叙情と構築も堂に入っていた。さすがに長時間で疲れた気持ちを助川敏弥の独奏十七絃による三章が、池上亜佐佳の真摯な演奏、花崎さみ八の典雅なる舞踊を得て、洗練の極みで癒してくれた。13日国立音楽大学作曲専攻4年作曲作品展vol.2は川崎真由子、菊池拓明、小池由理佳、引間友美、松村佑樹、見澤ゆかり、山本哲也が室内オケ初演。彼らにとっての必然、表現とは何か。18日東フィルは山田和樹指揮で伊福部昭交響譚詩他。20日八千代ホワイトデーコンサートは水野修孝の弦楽合奏のためのシンフォニアと弦楽合奏のための夜の歌を千葉室内合奏団、ヴァイオリンとピアノのための幻想曲。21日アンサンブルコンテンポラリーα韓国と日本の現在は日本と韓国の作曲家がイギリス民謡を編曲という不思議な企画。　22日東混定期は三宅悠太新曲、鈴木純明、野平一郎。

24日山本直純没後10年「直純さんがやって来た」大音楽会は秋山和慶、金洪才、山本祐ノ介が新日本フィルを振り、藤井一興、さだまさし、江戸家猫八、栗友会、NHK児童合唱団で3時間超、幅広い創作を回顧。動物や虫の鳴き真似とオケのみみくり協奏曲が白眉。25日地方都市オーケストラ・フェスティバルセントラル愛知響は齊藤一郎指揮で、木下正道がリコーダー鈴木俊哉とvc多井智紀の、水野みか子が箏野村祐子と尺八野村峰山の協奏曲、後半1時間バッハ・野平一郎のゴルトベルク変奏曲。同日ヴォクスマーナ定期で川上統の新作もあった。27日mmm…。　28日菖蒲弦楽三重奏団「日本弦楽三重奏曲の世界II発売記念コンサート」は戦中に作曲された團伊玖磨曲や、戦後すぐの日本をそのまま思うひたすらな心を描いた清瀬保二曲など。弦楽トリオの可能性を信じたくなる名演。埋もれた名曲発掘の理想的な形。30日NHKバレエの饗宴にて大井剛史指揮東フィルにより黛敏郎バレエザ・カブキの抜粋ではあるが生演奏初演。邦楽器や合唱も入り、後半は涅槃交響曲のフィナーレとなる巨大編成の綺曲は6月17日（日）Eテレ後3時から放送。

（にし・こういち）

日本音楽舞踊会議　楽譜出版部からのお知らせ

楽譜出版部が出来て新しい出版を始めています。それに伴い、既に出版済の楽譜の在庫確認、価格改正を致しましたのでご報告します。（楽譜出版部長　高橋雅光）

日本音楽舞踊会議 発行中の楽譜

助川敏弥：ＫＯＭＯＲＩＵＴＡ　作品 73（1986 年）
（東北地方に伝わる子守唄を主題としたピアノ曲）A4 版 9 頁　1,260 円
ピアノ曲集「ひえつきぶし」（2002 年）（東北民謡を主題とした作品）
Lacrimosa「ちいさき　たましいの　ために」
四手連弾「風の遊び」　A4 版 19 頁　1,680 円
歌曲集「白く光れり」向山房枝詩（1996 年）
（「ゆうやみ」「ゆらゆらと」「すずしさを」「ひさびさに」「つけしみに」）
A4 版 17 頁　2,100 円
歌曲集「ガラスの花束」立原えりか詩（1976 年）
（「陽春」「光りの矢」「ムラサキイロの少年」「親指姫」「秋のままごと」）　A4 版 25 頁　2,940 円
歌曲集「夕顔」金子みすず詩（1999 年）
（「夕顔」「土の草」「みそはぎ」「草原の夜」「だれがほんとを」）
A4 版 13 頁 1,680 円

高橋雅光：どんぐりっこのメロディー
宮田滋子詩による「おかあさんといっしょにうたう、あたらしい童謡曲集」
B5 版 27 頁　2,100 円

中島克磨：「モスクワ」ピアノのための詩曲　Poema”Moskva”　for piano
A4 版　8 頁　1,575 円

木幡由美子：「トッカータ」ピアノのために　“ＴＯＣＣＡＴＡ”for piano
A4 版　8 頁　1,260 円

北条直彦：「ピアノのためのヴィジョン 」Vision　for piano　A4 版　7 頁　1,260 円

黒髪芳光：「こどもの祭りⅡ」ピアノのための四手連弾曲集
（バイエル・メトードローズ併用）　A4 版　20 頁 2,100 円

小平時之助：歌曲集「北の国から」（「木地山ぼっこ」「ほしがき」　他 5 曲）
A4 版　14 頁 1,890 円

金籐　豊：「ピアノのためのトッカータ」Toccata―interactive for piano
A4 版　16 頁　1,890 円

西山淑子：「金子みすゞの詩による童謡集」　A4 版　51 頁　3,150 円

＊お求めは日本音楽舞踊会議まで、郵便振替用紙にご注文の曲名をお書きの上ご送金ください。

日本音楽舞踊会議出版局

会と会員の情報

１．ＣＭＤＪ　会と会員のスケジュール

7　月

1日(日)高橋雅光－　東京邦楽合奏団定期演奏会・高橋雅光作曲「早蕨の詩」ほか【日本橋劇場　14：00開演】

4日(水) 並木桂子－　クラリネット、チェロ＆ピアノコンサートベートーヴェン：三重奏曲“街の歌”サンサーンス：白鳥ポーランド民謡：クラリネットポルカ他(共演　富永佐恵子Vc 他)【江戸川区中小岩小学校、区民センター　他　15：30開演】

7日(土)**定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所　19:00～】**

7日(土)**声楽部会コンサート「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」【すみだトリフォニー 小ホール14：00　2,500円】(詳細は裏表紙参照)**

13日(金)**ピアノ部会コンサート【東京オペラシティリサイタルホール18:30　3,500円　学生2,500円】（詳細は裏表紙参照）**

14日(土)深沢亮子－　日生劇場ピロティコンサート 共演：永井公美子（Vn）植木昭雄（Vc）　シューベルト：ソナチネNo.2、ソナタ「アルペジオーネ」、Ｐトリオ No.1【14:00 日生劇場　問合せFax：F.シューベルトソサエティー　03-5805-6318 】

15日(日)藤村記一郎名古屋青年合唱団　東京公演　合唱オペラ「トラジコメディ・盗まれた森」【シアター1010（北千住駅西口すぐ）10：30開場・11：00開演／14:30開場･15:00開演　２回公演　全指定席　4000円(当日　4500円）】

29日(日)深沢亮子－栗栖麻衣子さんとの連弾とソロ【熊谷文化創造館さくらめいと太陽のホール15:00開演予定　問い合わせ：武田 080-3310-4238】

29日(日)高橋雅光－　日本尺八連盟埼玉支部定期演奏会･高橋雅光作曲「早蕨の詩」ほか【川越西文化会館「メルト」11：00時開演】

8　月

5日(日) 広瀬美紀子ＣＤ発売－ ソロピアノで奏でる「ピアソラ集Ⅱ」（北條直彦・依託編曲）　一般ＣＤ店でお求めになれます

7日(火)**定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所19：00～】**

２７日(月) 滝澤三枝子ピアノリサイタル＜煌く鍵盤＞【板橋区立文化会館小ホール・午後6時30分開演　2500円】

9　月

7日(金)**定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所　19:00～】**

8日(土)深沢亮子ピアノリサイタル　共演：ウィーン弦楽三重奏団 E.Sebestyen(Vn) H.Pascher (Vla) A.Skocic(Vc)吉田聖也 (Cb) モーツァルト:ケーゲルシュタット・トリオ、ベートーヴェン：ピアノとチェロのためのソナタ　No.4　シューベルト:ます　【14：00　浜離宮朝日ホール　（お問い合わせ）新演奏家協会03-3561-5012】

9日(日) 深沢亮子－　東邦大学佐倉看護専門学校創立20周年記念祝賀会【オークラ千葉ホテル16：00】

11日(火)深沢亮子－東浦亜希子　共演：松井利世子（Vn）
Schumann ピアノとヴァイオリンのためのソナタ　No.1ほか
【朝日カルチャーセンター新宿住友ビル７階　13:00
問い合わせ Tel:03-3344-1945】
21日(金) **CMDJオペラコンサート2012**
【すみだトリフォニー小ホール 詳細未定】
23日(日)深沢亮子－　千葉音楽コンクール本選審査
【問い合わせ：千葉音楽コンクール事務局 043-227-0055】
25日(火)深沢亮子－　共演：久武麻子(Cello)
シューベルト：アルペジオーネソナタ 他【朝日カルチャーセンター新宿住友ビル７階　13:00 問い合わせ Tel:03-3344-1945】

10　月
7日（日）広瀬美紀子ピアノリサイタル
ベートーヴェン：ピアノソナタ第17番「テンペスト」・ピアソラ：（北條直彦編曲）「孤独」助川敏弥：夏のうた（初演）他
【王子ホール（銀座）　14:00開演　3,500円】
9日(火)**定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所　19:00～】**
15日(月)**「様々な音の風景Ⅸ」～20世紀以降の音楽とその潮流～**
【すみだトリフォニー小ホール　詳細未定】

11　月
7日(水)**定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所　19:00～】**
18日(日) **若い翼によるＣＭＤＪコンサート５【すみだトリフォニー小ホール】（詳細未定）**
19日(月)深沢亮子－「翔の会」公開レッスン【10:00 コトブキD.I.センター
問い合わせ：大山喬子　044-966-5224】
27日(火)深沢亮子－　共演：上村文乃（Cello）　シューマン：アダージオとアレグロ　他【朝日カルチャーセンター新宿住友ビル７階　13:00 問い合わせ Tel:03-3344-1945】
30日(金)並木桂子―　共演：岸洋子他　ピアノ　デュオ　ブリランテ X
～名曲で巡るヨーロッパの旅　アレンスキー：組曲第４番・ロッシーニ：ウィリアムテル序曲・グリーク：ペールギュントより、他　【杉並公会堂小ホール　3,500円(小学生以下1,000円】問い合わせ先:080-3003－2102並木)

12　月
4日(火)**深沢亮子とその仲間による　“ピアノと室内楽の夕べ”**
深沢亮子（Pf.）恵藤久美子（Vln.）安田謙一郎（Vc.）
シューベルト：ワルツ Op.18(D.145)No.6 H-Dur、No.2 h-moll
ブラームス：ピアノとヴァイオリンのためのソナタ No.1 G-Dur
助川敏弥：Sunset for Violincello and Piano　初演(2011年作品)
モーツァルト：ピアノトリオ　No.5 K.542 A-Dur
【音楽の友ホール17：00開演　入場料4,500円（会員割引あり）】
7日(金)**定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所　19:00～】**
15日(土)室内楽コンサート－シューマン、ドヴォルザーク　ピアノ５重奏曲
Pf.深沢亮子　Vn.掛橋佑水、井上静香　Va.中村静香　Vc.宮坂拡志

主催（財）藤沢市芸術文化振興財団【湘南台文化センター市民シアター
16：00（予定）問い合わせ：0466-28-1135】

2013 年

1　月

7 日(土) **日本音楽舞踊会議　新年会【詳細未定】**

25 日(金) **声楽部会主催公演【すみだトリフォニー小ホール・詳細未定】**

27 日(日) 深沢亮子－　東金文化会館創立２５周年記念コンサート
ソロと室内楽　共演：Va.中村静香、Vc.上村文乃
【問い合わせ：東金文化会館　0475-55-6211】

2　月

7 日(木)**定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所　19:00～】**

18 日(月)**動き、舞踊、所作と音楽Ⅱ**
【すみだトリフォニー小ホール　詳細未定】

4　月

5 日(金)**ＣＭＤＪフレッシュコンサート２０１３　～より豊かな音楽の未来をめざして～【すみだトリフォニー小ホール　18:30 開演　2,500 円 】**
《詳細企画中》

6　月

14 日(金)**作曲部会公演【すみだトリフォニーホール小ホール　詳細未定】**

会員・賛助会員の皆様へ「スケジュール」へのお知らせとお願い

〇上記スケジュール記載の本会主催事業（ゴシック文字）には、会員・賛助会員・CMDJ 友の会の方は会員証呈示で無料、または会員割引料金でご入場頂けます。

〇毎号掲載されるこの欄に会員の皆様の活動予定を無料掲載させて頂きます。演奏会に限らず、出版、講演等も「音楽の世界・会と会員のスケジュール欄掲載希望」として日本音楽舞踊会議事務所までメールまたは Fax でお知らせ下さい。

〇お知らせの際は、①〇月〇日（曜日）②会員名　③催し物(出版物)名④メインプログラム一曲、もしくはメイン公演・講演内容を一つ　⑤【開催場所、開演時間、チケット価格、等】の順番でお書きください。

２．新入会員紹介

今井 梨紗子（いまい・りさこ　声楽　）

　この度青年会員として入会させて頂きました　今井梨紗子と申します。

入会に際し推薦して下さいました古川五巳先生、中島洋一先生に心より感謝申し上げます。

　昨年４月にフレッシュコンサート、9 月にはオペラコンサートに出演させて頂きました。色々と学ばせて頂くことが多く、大変貴重な機会となりました。

入会後も、古川博子先生に引き続きご指導いただきながら、真摯に音楽と向き合い精進して参ります。

どうぞよろしくお願い致します。

３．会員近況

藤村記一郎（作曲）

藤村です。皆様いかがお過ごしでしょうか

私、名古屋地方を中心に活動していますので、会員の皆様が多い東京方面での活動が少なくお目に掛かる機会も少なかったですが、今年は３月３１日、４月１日に、立川市民会館で、合唱劇「カネト」（田中寛次台本・藤村記一郎作曲）の東京公演をさせて頂きまして、おかげさまで、両日で 1800 名の観客、評判もよく、ほっとしています。観覧・ご支援ありがとうございました。

ご案内が遅れましたが、この度、私の所属する名古屋青年合唱団の東京公演を、７月１５日（土）に、北千住の「シアター１０１０」催します。「合唱オペラ・トラジコメディ＜盗まれた森＞」（加藤直台本・演出、林光作曲、指揮　工藤俊幸、合唱　名古屋青年合唱団）を演奏することになりました。

私も、役者したり、歌ったり、指揮したりしますので、お時間ありましたらぜひご覧ください。

この作品は、昨年の震災・原発事故が起こる前に名古屋で初演した林光作曲のオペラですが、林光氏が亡くなり＜林光追悼＞と銘打った公演でもあります。

また、内容が原発以後これからの私たちの生きていく方向を考えさせられるような中味になっています。

コンサート情報は下記「シアター１０１０」ＨＰでご覧になれます。

7/15（土） 11:00、 15:00 の2回公演で、チケットは全席指定4000円です。

http://www.t1010.jp/html/calender/2012/201/201.html

★大変な資金がかかりますが、助成金などどこからもいただけませんでしたので、皆さんの応援が頼りです。賛同金も募集していますので、よろしかったらご協力ください。翌日は、東京で大きな反原発の全国集会がありますので、そちらも併せて全国からのお申し込みを期待しています。

以上、ご案内、お願いを含めた近況報告とさせて頂きます。

藤村記一郎　kiichiro2003@ybb.ne.jp

編集後記

今月は７月にピアノ部会のコンサートが開催されるので、ピアノ関係の方々に読んでいただきたいということで、６月 24 日に帰国したばかりの深沢亮子さんに無理をお願いし、ツヴィッカウのシューマンコンクールの記事を書いていただきました。次号に後編を掲載します。それと、今月号は私の不手際から、ピアノ会員の文だけとなりましたが、『若い会員は語る』という特集で若い会員の意見を紹介しました。書き手の人数は多くはなかったのですが、若い方々の素直な声を聞くことができ、参考になりました。そう遠くない時期に、その第２弾として、声楽会員を中心に、若い会員の意見を掲載したいと思います。いまは、蒸し暑い梅雨の季節ですが、まもなく盛夏の季節を迎えます。猛暑ではなく、節電が出来る程度の暑さですむことを期待したいですが、よりよい音楽活動をめざして、少しくらいの暑さは、気持ちで乗り越えて行こうではありませんか。　　（編集長：中島洋一）

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福　島	福島大学生協	024-548-0091
千　葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東　京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	㈱紀伊國屋書店　和雑誌ｱｸｾｽｾﾝﾀｰ	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック㈱	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静　岡	吉見書店	054-252-0157
愛　知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大　阪	㈱ﾔﾏﾊﾐｭｰｼﾞｯｸ大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵　庫	㈱ジュンク堂書店　外商部	078-262-7794
京　都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖　縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長　：中島洋一　副編集長 ： 橋川 琢
編集部員：新井知子　浦 富美　大久保靖子　栗栖麻衣子　小西徹郎　高島和義　高橋 通
高橋雅光　戸引小夜子　北條直彦　湯浅玲子

音楽の世界７月号(通巻 540 号)
2012 年 7 月 1 日発行　　定価 500 円(本体 476 円)
発行人：芙二　三枝子
編集・発行所　日本音楽舞踊会議　The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN
〒169－0075 東京都新宿区高田馬場４－１－６　寿美ビル 305　Tel/Fax:(03)3369 7496
HP：http:// cmdj1962.com/　　E-mail：onbukai@mua.biglobe.ne.jp
http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/　（アーカイブ）
A/D：音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496　印刷：イゲタ印刷㈱ Tel: (04)7185 0471
購読料　年間：5000 円　（6 ヶ月：2500 円）　振替 00110－4－65140（日本音楽舞踊会議）

＊日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております
＊乱丁、落丁がございましたらお取替えします